

# 鉱物と粒子、身体の可能性

INTERVIEW

聞き手：今野裕一

写真：菊池良助

Interviewed by Yuichi Konno

Photo: Ryosuke Kikuchi

## 勅使川原三郎 Saburo Teshigawara

宮沢賢治が岩手県の伝統芸能である原体剣舞を見て書き上げた『原体剣舞連』。その詩にインスパイアされ生み出された『DAH-DAH-SKO-DAH-DAH』が、20年の時を経て、新たに改作され上演される。風が奏でる音楽のような詩に、世界的ダンサーはどのように応答するのか。ペヨトル工房主宰・今野裕一が、勅使川原三郎の独自のダンス観、身体論に切り込む。

### 鉱物性と音楽性

—『DAH-DAH-SKO-DAH-DAH』は初演時(1991年)と一緒に関わらせてもらったので(註1)、その作品がどういう風に変わっていくのが興味深いです。20年も前の作品だけれど、踊りつづねに“今”だと思ふんですね。同じものを繰り返しているわけじゃないから。

「そうですね。実際に作品をより良くするためには、公演中でも変えることがあります」

—宮沢賢治に対するアプローチは変わりますか？

「今回再演するものは、改作と言っていいでしょう。初演時の出演者は僕のみですから構成は変わるでしょうし、装置や音楽に変わる部分はあるでしょう。とにかく新鮮なアプローチをしたいと考えています」

—作品をつくる時、賢治ゆかりの種山高原に一緒に行きましたね。種山高原の丘の上に立っていたら、下の方から霧がふーっとやってきて、勅使川原さんを包んで……。種山に

は、星空と地上との境目がない。自分が溶けていく感覚。あの星空を賢治は見ていたんでしょうね。

「きれいでしたね。特別な光景でした。大きくなだらかな高原があつという間に霧で覆われた。緑の丘陵と晴れていた空が真っ白な巨大なスクリーンのような感じでした。賢治の詩は、宇宙や鉱物的なものを感じさせる言葉で出来ていて、ノイズやリズム、音楽を感じさせる。空気から音が聴こえてくる。空気が鳴っている。風が鳴っている。賢治は詩を心象風景と呼ぶことがあって、僕は身体と鉱物と風、空気や距離を強く感じる。そこに描かれている世界は、ダンスの根源的なところを示しているように、僕は思う」

### 身体は粒子で出来ている

『原体剣舞連(はらたいけんぼいれん)』とは

宮沢賢治が北上山地の山あいの集落・岩手県江刺市原体で100年以上も踊り継がれてきた剣舞をテーマにした詩。勅使川原による『DAH-DAH-SKO-DAH-DAH』はその詩からインスパイアされた作品である。タイトルは、詩の一節である剣舞の太鼓の連打、風の音、心臓の鼓動のオノマトペからとられている。

註1 今野が主宰する雑誌「夜想」からドキュメントブック『dah-dah-sko-dah-dah』(勅使川原三郎、1998年)が発行されている。

——賢治は、物質とか物理という言葉が合いますが、勅使川原さんの踊りや舞台演出も、モノと身体が溶けていくような感じです。物質が物理的に溶ける……。

「人間はそもそもモノと関わることで、様々な動きを記憶してきたと思います。だからモノがなくなっても動きは覚えている。たとえばあの角を曲がればお店に着くという動きを記憶し、頭の中に地図をつくる。この地図のつくり方が振付に相当するもので、そうやって人間は踊りをつくってきたと考えられる。古典における『型』も、同様だと言えのではないですか。

人間の動きはモノに既定されて一般化、大衆化、社会化されているところがある。逆に身体自体は、表面がすべて曲面で出来ていて、内側、内臓は液状、液体ですね。本来、身体は分節化できないほど、細胞の死と誕生の連鎖によって構成されている粒子の集合体です。その見地から望む身体表現、ダンスは全く別の方向に向かい、その可能性は広がると僕は長年考えている。その事を基点すれば、もっと別な動き方ができるはずなんです」

——でなければ、いつも同じルートを歩くことになるんですね。

「いつも同じルートを通ることを否定しているわけではないけど、たとえばカメラはシャッターを押さないで写真が撮れないというメカニズムですね。だから写真を撮るためには、身体の構造に型の意味を与えて動作する。シャッターを押すことをこんな言い方するのは馬鹿馬鹿しいと思うかもしれませんが、僕のダンスは意味を再現することが目的じゃないので、身体をより細かい粒子のように感じて、溶解すると理解します。そして身体は目的や意味に規定されない動きを生み出すものなんです」

## 上手に倒れる訓練をする

——ダンサーの一人ひとり違うところを生かして、賢治の詩を動きに構成するのは難しいですね。ダンサーに対してどうやってその動きを指示しているんですか？

「そうです。幸運にも困ったことに、僕は出演者たちを記号化できない、しない。普通、振付では記号化が大事なわけですが」

——そうですね、言葉をめちゃくちゃに並べて詩になるわけではない。

「僕たちは、動きを流れとしてとらえているんです。流れはどのように生まれ、生まれた動きが新たな動きをつくり、また次に発生する動きは……というように連なる。動きを単数とみなしません。それがいわゆる“ひとつの動き”に見えても、常に複合的要因が絡み合っていると“複数”と見るんです。ちょっとした変化が大きな流れを生む。直線の動きなんてないんです。身体における直線とは“直線”というイメージがつくっているにすぎない」

人間の身体は曲面と液体で出来ている。本来は分節しようがない、粒子の集合と流れなんです

——勅使川原三郎

——記憶され、目的や意味に規定された動きに代わるものを、体のほうに仕込んでおくんですか？

「そうです。記憶の代わりに外界を受け取る能力が必要になる。記憶すると、記憶から動きへという経過を通らなければいけなくなる。そうすると間違える。ぼくは『振付』をすると、逆に動けなくなると思っているんです。身体の動きって、記憶が整っている時よりも、そうではない時/条件のほうがスムーズです。記憶の再現より随時の即応のほうが正しいとぼくは考えます。数多くの鳥、特に高速度で滑空し激しく交差するツバメたちの飛び方を長時間見ていると考えたこと。なぜ鳥同士はぶつからないのか。彼らは空気の動き、重力や光、そして仲間のツバメたちとの距離感などを瞬時に感じ、互いの位置関係と速度角度をとらえては、随時変化、制御しつづけているように見えた。彼らは振付けられて飛んでいない。空中に作用している条件と自分とが一体となっているようだ。鳥から学ぶことは多い」

——その考えはバレエと対極ですねえ。

「僕がワークショップの初めに必ず言うことがある。『防衛本能をすてる』『自分や身体を守ろうとするな』『何かをやろうとするな』『いい加減にやれ』『責任を持つな』など、普通世間では不真面目と言われることばかり。身体にとって先ず大事なものは、先入観や恐れをもちたずにいることです。でも簡単ではないので、もし不安なら時間をかければいい。すこしずついい、それだけのことです」

——防衛の意識を開放しないといけないから、怖いだろうし……言っても簡単じゃないですよね。勅使川原さんのツアーについて僕がびっくりしたのは、いきなりふわっと倒れるんです。たとえば右から倒れますよ、という意識が見えないのがすごい。

「人間の身体は、もともとバランスが崩れるように出来ている。それを上手く使えば、いろいろなことができるようになる。普段人間は一生懸命バランスを保っている。真っすぐ立つなんて、相当の緊張する努力でやっていることです。逆にバランスをいかにずらすか/崩すかで、上手に自転車に乗れたり、走れたり、歩いて、座れて、横になれる。身体や動作の有り様をごく普通にとらえれば、『技術』を感じられるはずですよ」

## 動作の冒険

——そういう意味で勅使川原さんのダンスは、いつも予想のつかない動きが出てくる。そのマジックってなんでしょうか。

生きている人と死んでいる人が奏でている音楽。風なんて、もしかしたらそういうものなのかもしれない  
 —勅使川原三郎

「まあ、すべては事実の積み重ねですが、いつも自分の想像を超えたものをつくりたいと思っています。こういう矛盾が大事です。宮沢賢治をやるためには、すでに持っていた考えに囚われずに『DAH-DAH-SKO-DAH-DAH』に向かいたい。常に未知の領域に近づきたいです。そのためには、身体を準備しなくてはなりません。

たとえば、身体が上手く機能しない世界を積極的に構築するとはなにか。宇宙側から見れば人間なんてなんの意味も無いだろうとか。人間は宇宙に恋をしているのだろうか、とか」

——宇宙に秩序があると思いたがっているのは、人類のほうかもしれない。

「何十億、何百億……いやもっととてつもない数の、いや数を超える空間、いや空間なんて超えるだろうな、宇宙ってなんだということになる。人間の何千年かの研究でわかるわけがない。わからないことは面白い。が、人間の身体はもっと面白い。身体の動きをダンスというレベルで考えることの不可思議。自然も人工も身体を通して見るともっと面白くなる」

——葉っぱを動かす風の動きとか。素粒子がぶつかり合って線を描いているのも、ある種のダンスみたいなものですよ。そんな感じの究極の踊りをつくらしたら、いつ終わるかわからないですね(笑)

「僕にとってダンスは、身体を通して宇宙との距離をどこまでもちうるかという問いなんだと思う」

——それは感じます。賢治の言葉のように、遥か彼方まで離れて行って、すぐそばまで戻ってくる感じ。戻ってきてもちよつとズレているだけで……でもそのズレが勅使川原さんのダンスだと思う。

「うん、それは言い得て妙というか。僕はダンスがあんまり好きじゃない。いわゆるダンスというダンスはね。ダンスを否定しているわけじゃなくて、記憶化されたダンスを否定している。『ダンスをやりたいと思ったらダンス以外のことをやらなきゃダメだ』ってよく言うんです」

## 生と死が合奏する音

——宮沢賢治の詩に“今”取り組むことについてはどう思っていますか？

「去年震災がありました。話を重ねることはできませんが、賢治のなかには独特な死の概念がありますよね。人の魂をもう一度呼ぶとか、送るとか。またそういう舞踏的なものが地面から舞い上がるときに、星に対して賢治が思ったこととか……」

——生と死が溶けているようなところがありますね。賢治は妹が死んだときも、自分の体験じゃないけど擬似体験みたいにしてながら書いている。本当は死んだら書けないんだけど。

「生と死の間に線があるような気はしないんだよね。賢治の詩のなかにある言葉、夜の冷たさみたいなもの。あるいは地面が鳴ってる、空気が鳴ってる、生と死が合奏しているように聞こえてくる音。賢治の詩は美的な感じがしない。そこがまたいい。本当の音なんだよ。生きている人と死んでいる人が奏でている音楽。風なんて、もしかしたらそういうものなのかもしれない」

勅使川原三郎(演出家・振付家・美術家・照明家)

1981年より独自の創作活動を開始。85年以降、自身のカンパニーKARASと共に世界中で公演を行ない、既存のダンスの枠組みでは捉えられない新しい表現を追求している。呼吸を基礎にした独自のダンスメソッドと、光・音・空気・身体によって空間を質的に変化させ創造するかつてない独創的な作品は、ダンス界にとどまらず、あらゆるアートシーンに衝撃を与え、造形作家、映像作家としての評価も高い。パリ・オペラ座バレエ団への振付作品、フェニーチェ歌劇場のオペラ演出作品等もある。

聞き手：今野裕一(ベトトル工房主宰/「夜想」編集長)

「夜想」「銀星倶楽部」「ur」などの雑誌を創刊・編集。西武百貨店と共同で「WAVE」を編集。文化イベント、展覧会のプロデュース、ディレクションを手がける。2000年に休止するも2003年「yaso」を復刊し、同時に浅草橋にギャラリー・パラボリカ・ピスをオープンして人形から現代美術、パフォーマンスまで幅広い展示・イベントを行っている。

### 『DAH-DAH-SKO-DAH-DAH』

演出・振付・美術・照明：勅使川原三郎  
 11月23日(金・祝)～25日(日)  
 於：東京芸術劇場 プレイハウス

詩の生まれる場所へ——勅使川原三郎が紐解く、宮沢賢治の“音”

今回は、宮沢賢治の詩集「春と修羅」に収録されている『原体剣舞連(はらたいけんばいれん)』からインスパイアされた『DAH-DAH-SKO-DAH-DAH』(1991年初演)を、新たにクリエーションした改作を発表する。

初演後、「ネクスト・ウェーブ・フェスティバル」(92年、NY)、「UKジャパン・フェスティバル」(91年、ロンドン他)など、欧州8カ国17都市で上演。「モントリオール・ヌーベルダンス・フェスティバル」(91年)では、フェスティバルの最優秀賞を受賞。



©小川峻毅

はら たい けん ぼ ひ れ ん  
原体剣舞連

(mental sketch modified)

—宮沢賢治『春と修羅』より

dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah

いさう  
こんや異装のげん月のした

とり づきん  
鶏の黒尾を頭巾にかざり

かたは  
片刃の太刀をひらめかす

はらたい をどりこ  
原体村の舞手たちよ

とき じゆえき  
鴉いろのはるの樹液を

しんさん  
アルペン農の辛酸に投げ

せい  
生しののめの草いろの火を

高原の風とひかりにさゝげ

まだ かは  
菩提樹皮と縄とをまとふ

とも  
気圏の戦士わが朋たちよ

かうき  
青らみわたる顯氣をふかみ

ぶな  
檜と掬とのうれひをあつめ

じゃもんさんち かざり  
蛇紋山地に篝をかかけ

ひのきの髪をうちゆすり

まるめろの匂のそらに

あたらしい星雲を燃せ

dah-dah-sko-dah-dah

きよ  
肌膚を腐植と土にけづらせ

あら  
筋骨はつめたい炭酸に粗び

つきづき  
月月日光と風とを焦慮し

かさ しふ  
敬虔に年を累ねた師父たちよ

こんや銀河と森とのまつり

じゅん てんまつせん  
准平原の天末線に

さらにも強く鼓を鳴らし

うす月の雲をどよませ

Ho!Ho!Ho!

たつた あくろわう  
むかし達谷の悪路王

まっくらくらの二里の洞

こくやじん  
わたるは夢と黑夜神

首は刻まれ潰けられ

アンドロメダもかざりにゆすれ

めん  
青い仮面このこげおどし

太刀を浴びてはいつぶかぶ

くも  
夜風の底の蜘蛛をどり

胃袋はいてぎつたぎた

dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah

やいば あ  
さらにたたく刃を合はせ

へきれき  
霹靂の青火をくだし

しほう よる きじん  
四方の夜の鬼神をまねき

じゆえき よ  
樹液もふるふこの夜さひとよ

赤ひたたれを地にひるがへし

ひょううん  
電雲と風とをまつれ

dah-dah-dah-dahh

よかぜ  
夜風とどろきひのきはみだれ

い  
月は射そそぐ銀の矢並

は  
打つも果てるも火花のいのち

まし  
太刀の軋りの消えぬひま

dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah

いなづま かやほ  
太刀は稲妻萱穂のさやぎ

せいざ  
獅子の星座に散る火の雨の

あま  
消えてあとない天のがはら

打つも果てるもひとつのいのち

dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah

(一九二二、八、三一)